

tags:

- wiki
- concept field: philosophy-aesthetics title: "概念解説: キッチュ (kitsch)" related:
- "[[Greenberg — Avant-Garde and Kitsch]]"
- "[[Costello Ch.1 — モダニズムとフォーマリズム]]" parent: "[[INDEX]]"

Kitsch (kitsch)

グリーンバーグのモダニズム理論において、アヴァンギャルドの対極に位置づけられる文化現象。「Avant-Garde and Kitsch」(1939)で最初に体系的に論じられ、Costello Ch.1 ではモダニズムの自己批判を動機づける外部的脅威として再定位される。

関連: [[Greenberg — Avant-Garde and Kitsch]], [[Costello Ch.1 — モダニズムとフォーマリズム]] §i

1. グリーンバーグによるキッチュの定義

歴史的起源

キッチュは産業革命の産物である。都市化と普遍的識字率の確立により、伝統文化を享受する余暇を持たず民衆文化の土壌も失った新しい都市大衆が出現した。この大衆の文化的需要に応えるために商品化された**代替文化 (ersatz culture)**がキッチュである。

「新しい都市大衆は社会に圧力をかけ、自分たち自身の消費に適した文化を提供するよう求めた。新しい市場の需要を満たすために、新しい商品が考案された——代替文化、キッチュ」(Greenberg, 'Avant-Garde and Kitsch')

構造的特質

特質	説明
機械的	公式 (formula) によって作動し、再現可能
代理的	代理体験 (vicarious experience) と偽りの感覚を提供
寄生的	成熟した文化伝統の技法・発見を借用し、体系化して希釈する

特質	説明
アカデミック	すべてのキッチュはアカデミックであり、すべてのアカデミックなものはキッチュである

キッチュとアカデミズムの同一視

グリーンバーグにとって、アカデミズムはもはや独立した存在ではなく、キッチュの「正装した表看板」(stuffed-shirt front)にすぎない。産業主義の手法が手工芸を駆逐したのと同様に、キッチュはアカデミックな形式を工業的に量産する。

2. 核心テーゼ:「過程の模倣」対「効果の模倣」

グリーンバーグの最も鋭い定式化:

アヴァンギャルドが芸術の過程(**process**)を模倣するのに対し、キッチュは芸術の効果(**effect**)を模倣する。

ピカソ対レーピンの比喻

この対比はグリーンバーグが用いた架空の実験——ロシアの農民がピカソとレーピンの絵のあいだで選択する——によって具体化される。

	ピカソ(アヴァンギャルド)	レーピン(キッチュ)
提示するもの	線・色彩・空間の造形的価値 (原因)	認識的・感情的効果がすでに 画面に含まれている(結果)
鑑賞者に求めるもの	造形的質への反応を経た反省 を通じて意味を引き出す	努力なしに即座に享受できる
享受の構造	「反映された効果」(reflected effect)は鑑賞者が投入する	「反映された効果」がすでに 作品に前消化(predigest)されている

「ピカソが原因を描くところで、レーピンは結果を描く。レーピンは鑑賞者のために芸術を前消化し、真正な芸術において必然的に困難なものを迂回する近道を提供する」(Greenberg)

3. Costello Ch.1 におけるキッチュの理論的位置

モダニズムの「なぜ」——キッチュは外部的脅威

Costelloは、グリーンバーグのモダニズム論における社会歴史的動機を復元する。アヴァンギャルドの内向的転換(メディア固有性への還元)は、二重の脅威への防衛として動機づけられていた:

脅威	性質	比喻
キッチュ	外部からの腐敗	真正な文化の希釈された代替物
アレクサンドリア主義	内部からの停滞	伝統への空虚な形式的追従

「アヴァンギャルドは『芸術の自己保存本能の具現化』であり、『芸術の価値のみに関心を持ち、それに対して責任を感じている』」(Greenberg, 'Towards a Newer Laocoön', 28; Costello Ch.1 §i で引用)

「純粋性」の再解釈

Costelloの重要な指摘: グリーンバーグにとって「純粋性」(purity)は到達すべき状態の記述ではなく、キッチュとアカデミズムから自らを守るための活動(内在的自己批判の実践)の記述である。キッチュの概念なしには、なぜ芸術がメディアの自己検証へと向かったのかが説明できない。

後期グリーンバーグにおける脱文脈化

後期グリーンバーグは、この社会歴史的背景(キッチュの脅威)を明示することを怠り、モダニズムが「どのように」機能するかという記述のみに集中した。Costelloによれば、この脱文脈化こそが、モダニズムを「純粋性」の自律的・規範的プログラムとして誤解させる原因となった。

4. キッチュの普遍性と政治性

史上初の普遍的文化

キッチュは西洋の都市に留まらず、全世界の土着文化を駆逐しつつある。グリーンバーグはこれを「史上初の普遍的文化」と呼ぶ。その魅力は安価さや西洋の威信だけでは説明できず、効果の前消化という構造的特質に由来する。

全体主義によるキッチュの利用

全体主義体制がキッチュを公式文化とするのは、支配者が俗物だからではなく、以下の理由による:

1. キッチュは大衆の文化であり、大衆に迎合する安価な手段である

2. アヴァンギャルドはプロパガンダの注入が困難であるのに対し、キッチュは可鍛的(pliable)である
3. キッチュは独裁者を人民の「魂」により密接に結びつける

5. 隣接概念との関係

概念	提唱者	キッチュとの関係
カルチャー・インダストリー	アドルノ／ホルクハイマー	キッチュとほぼ同時期に独立して定式化された類似概念。Costello Ch.1 で同等物として言及
アレクサンドリア主義	グリーンバーグ	キッチュが外部からの脅威なら、アレクサンドリア主義は内部からの脅威。両者はキッチュ＝アカデミズム同一視により接合される
模倣の模倣	グリーンバーグ	アヴァンギャルドの自己言及性を指す。キッチュの「効果の模倣」とは対の関係
前消化された芸術	グリーンバーグ	キッチュの作用機制を表す比喩。鑑賞者の反省的努力を省略する構造

6. 概念史的位置

年代	文脈	キッチュ概念の扱い
1939	Greenberg, 'Avant-Garde and Kitsch'	初出。アヴァンギャルドとの対比で体系的に定義
1940	Greenberg, 'Towards a Newer Laocoön'	キッチュの脅威がモダニズムの自己保存的転回を動機づけるものとして再言及
1960	Greenberg, 'Modernist Painting'	キッチュへの明示的言及が後退し、メディア固有性の自律的論理が前面化

年代	文脈	キツチュ概念の扱い
1971	Greenberg, Bennington Seminars	社会歴史的な文脈がさらに脱落。美的判断の問題に集中
2024	Costello, <i>Aesthetics After Modernism</i> Ch.1	「なぜ」の次元を復元し、キツチュの脅威がモダニズムの動機的基盤であったことを再確認

関連項目

- [[Greenberg — Avant-Garde and Kitsch]] — 原論文の要約
- [[Costello Ch.1 — モダニズムとフォーマリズム]] — キツチュがモダニズムの動機として位置づけられる文脈
- [[概念解説 — 無関心 (disinterest)]] — グリーンバーグ美学のもう一つの基礎概念